

## 中国と日本におけるボート競技者育成体制の比較研究

笹井 善仁      成 万祥      勝田 隆

キーワード：ボート競技者,育成体制

Japan and China Rowing Athletes Training System Research

Yoshihito Sasai    Cheng Wanxiang    Takashi Kathuta

### Abstract

Rowing originated in Britain, which has already been listed as an official event on the first Olympic Games in 1896. However, it was canceled because of the bad weather. Not until the next Olympic Games in 1900 was rowing held. Rowing is an event which has always been monopolized by Americans and Europeans. They are more experienced and started earlier than the Asian countries. Since the separation of weight classes in the Atlanta Olympic Games (1996), it became possible for the East Asian players, who tend to have smaller physique, to enter the Olympic Games. Rowing was carried out in China in 1995, which only has a history of 55 years. Although it started later in China than in Europe and America, China has achieved good results and found their own advantage in Asian rowing. Japan Rowing Association (JARA) has focused on the project of weight separation and strengthening exercise. As a result, Japan won the 2000 world championship gold medal in the International Conference for the first time. They competed in the 2000 Sydney Olympic Games and took 6th place. The strengthening exercises have produced positive and effective results.

Rowing has become more and more popular in Japan and China, experts and scholars predict both countries to have a high chance of receiving gold medals. More and more experts and scholars are engaged in research in rowing. Through literature and data, on-site interviews, questionnaires and logical analysis, the author made a survey in the age of rowing, rowing motivation and the events the players took in the past and other aspects of the investigation among the Shanghai Rowing team of 38 athletes (of which 14 were male, 24 female) and Miyagi Prefecture, Japan rowing team 44 players (of which 31 were male, 13 female). They also combined Japan and China with the different rowers training system, and did depth discussion and analysis. It's said that: 1. Japan does not have professional rowers that athletes train in leisure time through the school sports club. However, the Chinese rowers are professional athletes that they train in sports schools from an early age into the training system. 2. China stressed that the international prestige sports and the gold medal first. Usually it tends to ignore the all-round development, Japan, although the pursuit of gold medals, attaches great importance to comprehensive development of athletes. 3. Training system in Japan led to Japan's period of training athletes of all ages out of touch. In contrast, the Chinese system is more systematic. It demonstrates the superiority of certain training. This survey provide Japan and China some reference and basis for the future optimization of rowers training system.

Key words: Rowing, training system, China, Japan

## I. 本研究の背景

現在、世界のスポーツは、運動・スポーツ活動による健康の維持・増進、スポーツ選手のコンディショニングや競技力の維持・向上、そしてスポーツ・レクリエーション活動やスポーツ組織のマネジメントに関する知識と技術を持った人材を求めている。その中で、国際舞台で活躍できる競技者には、天賦の才能が必要であることは論を待たない。元中国オリンピック委員会主席の袁偉民は、「先天的に優れた運動才能をもっている競技者だけがスポーツ競技のトップレベルに達することができる。」と述べている。

日本と中国は第二次世界大戦後、オリンピックとアジア大会をめぐり、互いに競い合ってきた。現在は、北京オリンピックに象徴されるように日本のスポーツ競技力はオリンピックメダル獲得数から見て衰退しつつある。近年では、2004年アテネ五輪に獲得した日本のメダル数は37個、北京オリンピックにおいては25個と減少していることから競技力低下が見てとれる。中国はアテネ五輪では63個のメダルを獲得し、2008年中国で開催された北京オリンピックにおいてメダル獲得総数100個という輝かしい功績で金メダルの獲得数世界1位の成績を収めている。その中で、中国はボート種目で北京オリンピックにおいて初めての金メダルを獲得した。アジアからみても初めての獲得である。

日本では、2000年に当時の文部省から「スポーツ振興基本計画」が発表され、スポーツ各方面では、組織の現状や外部環境との関係、それに伴う諸問題などを正確に把握した上で、その後の具体的な改革が迫られるようになった。しかし、オリンピックでのメダル獲得数から見ても世界との競技力の差は歴然である。

日本のボート競技を統括する組織である

日本ボート協会(JARA)では、オリンピックでのメダル獲得のため以前から選手強化活動を行っていたものの、体格に勝る欧米諸国の選手と差を埋めることが出来ずにいた。そんな中、1996年アトランタ五輪から軽量級種目が採用され、体格的に劣っていた日本選手でも上位進出の可能性が出たことで、JARAでは、軽量級種目に重点を置き強化活動を開始した。その結果、2000年世界選手権で国際大会初となる金メダルを獲得、シドニー五輪でも初入賞(6位)を果たすなど強化活動が確実に実を結んでいる。

現在、ボート競技が盛んに行われているのは発祥の地でもある欧米諸国である。オリンピック・世界選手権等の結果を見ても競技力は高い位置にある。

ボート競技は、オリンピック種目としても正式に採用されている。男子は第1回アテネ大会、女子は第21回モントリオール大会から競技が行われている。

アトランタオリンピック(1996)から軽量級種目が採用され、体格的に劣っていた日本選手でも上位進出の可能性が出てきたことで、日本ボート協会(JARA)では軽量級種目に重点を置き、強化活動を開始した。その結果として、2000年世界選手権で国際大会初となる金メダルを獲得し、その年のシドニーオリンピックにおいてもオリンピック史上、初の入賞(6位)を果たす。強化活動が確実に身を結んだ結果となった。しかし、先に行われた北京オリンピック大会(軽量級ダブルスカル)において男子が13位、女子が9位と目標にした成績には届かなかった。また、メダルを期待された男子においては日本の第一人者である武田大作選手が4大会連続の出場、女子の岩本亜希子選手

---

社団法人日本ボート協会(JARA)日本のボート略史

中国赛艇协会 中国赛艇协会官方网上

も3大会連続出場となっており、両選手を超える若手の台頭が望まれている。当初は未知のスポーツと取り組み、幾多の苦難の道を辿りながら、今日ようやく世界の水準に近づき、世界の仲間入りが出来るようになったと考える一方で、世界で活躍できるトップレベルの競技者を組織的・計画的に育成する必要があると考えられる。

中国のボート競技は1930年にイギリス人、ロシア人から中国に伝わった。1956年、中国の杭州西湖で初めてのボート競技の試合を行った。1984年、ロサンゼルスオリンピックで、中国は、女子舵手つきフォア種目で第8位を獲得し初めての入賞となった。1988年のソウルオリンピックでは同種目で銀メダルを獲得、女子舵手つきエイトで銅メダルを獲得した。1996年のアトランタオリンピックでは女子ダブルスで銀メダルを獲得。中国のボート競技の発展は、中国のボート競技の管理システムに従って曲折の過程を経験してきている。

先に行われた2008年の北京五輪の準備の際には、ボート競技の発祥の地といわれるイギリスのイートンで行われた2006年世界選手権大会で初めて五輪種目である女子軽量級ダブルスカル、男子軽量級舵手なしフォアで金メダルを獲得し、優秀な成績を収めた。そして新たに2008年8月17日、唐賓・金紫薇・奚愛華・張楊楊、この四人は優勝を勝ち取った。中国ボート史初のオリンピックで金メダルという新たな歴史を改めて作り出した。

2010年広州アジアボート競技大会では、多くの種目で中国代表が金メダル獲得、入賞を果たしている。日本は出場種目5種目においてメダルを獲得。アジアの中では日中共に高い競技レベルにあると考えられる。

1996年アトランタオリンピックより軽量級種目が採用され、アジア勢の成長が少

しずつ認められてきているが、中国・日本をはじめアジア勢はトップとの差にまだ距離があり、これからの競技力向上と選手発掘・育成は大事な強化活動だと考えられる。

## II. 研究目的

本研究は、世界で国際競技力の向上を見せられている中、中国と日本との間において、スポーツ事業の発展について着目する。特に日中両国のスポーツ選手育成システムの違いについて検討することを第一の目的とし、より良いボート競技者を生み出すための選手育成システムの相違を分析することを第二の目的とする。これまで、日本と中国のボート競技分野での選手育成に関する研究はあまり蓄積されておらず、また日本と中国のボート競技についての現状はこれからのアジアのボート界、世界のボート競技力向上に繋がるものと考え、本研究は日中ボート競技者育成システムに関する基礎的な研究として位置付けられよう。

これらのことを明確にし、今後のボート競技者発掘・育成に大きく関与し、世界の舞台で戦う未来の競技者をより良くサポート出来る体制を研究する。

## III. 研究方法

本研究は日中のボート競技者の育成方法の違いに関することを明らかにする調査研究である。具体的には、日本と中国の競技者育成システムの研究をはじめボート競技者の環境・生活等の現状を明らかにし、これから世界へ羽ばたく未来の有望な競技者への競技力向上の手助けになればと考える。

1. 文献資料法
2. インターネット調査法
3. ヒアリング調査法

#### IV. 結果及び考察

日本と中国の競技者育成システムについて

1920年代以来、競技スポーツレベルの急速な発展にしたがって国際間の競争は日々激烈になってきた。世界中の競技スポーツ強国はトレーニングの科学化を重視してきた。各国は、現代の先進科学技術をスポーツトレーニングの領域に積極的に活用し、科学的理論と方法及び先進技術と設備を用い、競技者をトレーニングさせ、さらにスポーツタレントの選抜を科学的トレーニングの重要な部分にした。例えば、旧ソ連、ドイツ（旧西ドイツと旧東ドイツ）、ルーマニアなどの国々は、スポーツタレントの選抜を国としての重要な研究課題として、適切な選抜制度を打ち立てた。

中国では1980年頃から、スポーツタレントの選抜に関する研究が促進された。多くの研究者とコーチは外国のスポーツタレント選抜に関する経験を学習した上で、長期的な研究と検討を加えることにより、スポーツタレントを選抜する意義と選抜の仕方を徐々に明確にしてきた。

日本の競技者育成のシステムは大きく4つに分けられる。1) ナショナルチーム 2) 企業のクラブ 3) プライベートクラブ 4) 各学校の代表チームの4つである。2) 3) 4) から国際大会に参加するため、各チームから優秀な人材を選抜して、短期的なトレーニングを行い、1) ナショナルチームとして試合にでる。しかし、このような各学校とアマチュアクラブのトレーニングだけでは、現在競争の激しい世界では、どうしてもスポーツ強国になるには難しい。

日本は、基本的に小学校・中学校の義務教育を終え、高校そして大学へと進む。各学

校には部活動がある。その中でもボート競技を選択する競技者はほとんどが高校から開始する。これは何故かという一つはボート競技を行う環境である。ボート競技は水上スポーツであることから湖・川・海といった専用のコースが必要不可欠である。よってボート競技を運動部として存在する学校も限られてくる。その中から大学へ進学しボート競技を継続する競技者は減少傾向にある。そして小学校から中学校、中学校から高校、高校から大学へと進学時に指導が断絶するという欠点もある。競技者育成には指導者の一貫した指導方法を確立することも問題の一つである。

これらのことを踏まえ、日本ボート協会はオリンピックや世界大会への出場選手を大会等によって各チーム・学校・大学から選抜する。この時、競技者たちは、基本的には、金銭的に全て自己責任でまかなうことになっている。現在は五輪出場選手の強化を狙って、「強化金」の支給等が行われるが、原則的には大会参加や日ごろのトレーニング、指導者の選択等、全て自己責任である。よって競技者らが五輪や世界大会に出場するのも個人の資格ということになるし、そこで優れた成績を収めれば、それは彼ら個人の功績となるのも事実である。ボート競技の大会によって賞金が出る大会は無く、競技者の個人負担は疲労と同時に金銭的な問題も多くあると考えられる。

中国には「挙国体制」というシステムがある。

これは、中国におけるスポーツ選手は国家が育て、国家の為に競技を行い、その成果は国家に帰することが原則となる。そのために、国家は彼らに基本的な衣食住と豊かな練習環境、指導者を提供する。最終目標はオリンピックであり、そこで金メダルを取って、中国の威光を世界に示すことである。中国の競技者育成システムは三つのレベル

曾凡輝, 王路徳, 邢文華他著, 関岡康雄監修. 「スポーツタレントの科学的選抜」. 道和書院. P2. 1998

からなっている。この三つレベルの指導思想は「思想一盘棋、組織一条龙、訓練一貫制。」である。これはつまり、「思想を一致させ、組織を統一し、訓練を一貫する。」という方針である。最初は才能がある子どもを選抜し、基本的なトレーニングをさせ、その中で優秀なスポーツ選手が生まれる。これを基盤とした広いピラミッドのようなスポーツトレーニングシステムである。これがまさに軍事領域のような「挙国体制」である。

表1 中国の競技者育成管理システム

一、初級トレーニング形式：小学校、中学校、伝統的なスポーツ学校、アマチュアスポーツ学校。
二、中級トレーニング形式：重点アマチュアスポーツ学校、スポーツ中学校
三、高級トレーニング形式：県と市チーム、国家代表チーム

中国のボート競技者は各地方の水上運動学校である业余体育学校へ入学する。入学後は午前と午後に1日2回の練習が基本であることが。そして夜には授業が行われる。中国S県ボートチームN監督によると、S県のチームには6歳から加入している選手もいるとのことだった。业余体育学校で優秀な選手は、今度は地域ごとに集められ、地域代表選手として指導を受ける。最近のボート競技者の中には、陸上競技・バスケットボールを経験した競技者が、スカウトされ種目変更を行いボート競技開始することがあるという。スカウトする際には、保護者の身長・体重など身体測定も行われ、10種類以上の項目があるとのことだった。競技者に対しては、身長・体重等の身体測定は毎月行われ、競技の記録等が全部数字化されているという。

ここで更に優秀な選手は北京へと召集さ

れ、「国家チーム」の一員として、超一流の英才教育を受ける。オリンピック・世界選手権などに出場するのも基本的に国家チームの選手から選出される。中国のボート競技大会では賞金がある。中国全国大会に出場し、一般的に8位までに入賞すると賞金が贈られ、優勝すると個人に対して1万元以上が贈られるという大会もあるという。

まとめると中国のボート競技者育成では競技者養成の基本となる「业余体育学校」→「省・市体表」→「国家代表」というピラミッド型の「三級制度」システムは確立されていることがわかる。この三級制度は、オリンピックで金メダルを取るためのものであり、そのための「挙国体制」だと言える。このピラミッドに入れない者は、基本的には競技者としての道を遮断され、ボートを含めスポーツとはほとんど縁のない生活を送ることになる。すなわち、日本のような中学、高校には部活動と言われるものはなく、スポーツと関わるといっても、休み時間に校庭で身体を動かすというのが一般的である。そして、高校時は、大学入試に向けた勉学に励むというのが中国人の一般的な姿である。しかしN監督によると、省・市の代表チームや国家チームに在籍した競技者が、引退もしくは突然ケガや何らかの原因で競技を継続できなくなった場合、大学受験や就職することは非常に難しくなる。専門競技のコーチにも人数は限られている。これはご承知の通り一日の半分をトレーニングや食事・休息に費やし、一～二時間の勉学では同世代の子との知識の差の開きが大きくなってしまう。この事は、ボート競技に限らず、中国のあらゆる競技者に対して、そしてこれからの競技者に対しての大きな問題であると言える。

## V. まとめと今後の課題

日本国では、世界でも通用するトップアスリートを多く輩出するために多くの政策を打ち出している。現段階でボート競技に関しては「競技者育成プログラム」はまだ構築されていないのが現状である。

ボート競技は、水上種目の為、湖や川といった競技を行う環境がある学校へと限られてくる。その上で、一貫指導システムの構築が遅れていることもあり世界で通用するための日本国独自のシステム構築が必要である。特に国際競技力向上の観点からも国家規模のタレント発掘システムの構築が必要であると言えよう。

中国の競技者育成システムは大きく3つのレベルからなっていることがわかった。

- 1) 初級トレーニング形式
- 2) 中級トレーニング形式
- 3) 高級トレーニング形式

これは低いレベルが高いレベルに従属するという管理システムであり、旧ソ連から学んだものであった。中国における競技者は国家が育て、国家の為に競技を戦い、その成果は国家に帰することが原則となること大きな特徴である。そのために中国国家は競技者に基本的な衣食住と豊かな練習環境、指導者を提供する。最終目標はオリンピックであり、そこで金メダルを取って、中国の威光を世界に示すことである。

日本と中国の競技者育成システムを比較すると大きな違いは2つあると著者は考える。

一つは、世界に通用する競技者の輩出方法である。中国の競技者育成は三級制度を基本に、国家チームを目指し幼いころから一貫した教育を受け、中国国家のためにオリンピック金メダルを目指す。日本は、かなりの割合で競技者が中学・高校時代に運動部に所属し、程度の差はあれ、チャンピオンシップ形式の大会に出場する経験を持って大学へ進学、もしくは企業で競技を継続す

る。そこから選抜された優秀な競技者で金メダルを目指すことになる。

つまり、日本はある程度スポーツの普遍化が進んでいるのに対し、中国はエリート化していると言える。二つ目は、国のサポート体制である。中国は国家が全面的に衣食住のサポートするのが大きな特徴である。競技者からすれば競技に集中でき、一握りである国家代表を目指す大きな力になり、五輪での金メダルという目標に精進出来る。しかし、一方で引退後や競技の道を外れた場合は、その後の生活において厳しい状態になるのも確かである。日本は、競技者に対して、競技生活中は基本的に自己責任である。金銭的なことから大会参加や日ごろのトレーニング、全てが自己責任で貫かれている。しかしながら、引退後や競技を継続出来なくなった場合は、義務教育という制度で基本的な勉学は培われているため次の人生へのステップは行いやすいと考えられる。以上のことが明らかになった。

## 引用・参考文献

- 1) 曾凡輝, 王路徳, 邢文華他著, 関岡康雄監修, 「スポーツタレントの科学的選抜」, 道和書院, P2, 1998
- 2) 国赛艇协会中国赛艇协会官方网(2011.10)
- 3) 和久 貴洋, 「ジュニアからの選手発掘を考える」 Grass Roots [sample], 国立スポーツ科学センタースポーツ情報部, 2003
- 4) Jason Gulbin, 「オーストラリアにおけるタレント発掘モデル」, JISS 国際スポーツ科学会議 2004, P13, 2004
- 5) 勝田 隆ら, 「タレント発掘プログラムの必要性と可能性」 種目転向プログラムの構築に関する基礎調査 仙台大学紀要第36巻第2号, 2005
- 6) 姜 洋, 「中日スポーツ選手育成システムの比較から」, 現代中国事情 第23号

(2009. 1.5)

- 7) 日本経済新聞. 「有望なジュニアを発掘」,  
1月29日朝刊. 2004
- 8) 飯田 晴子, 「オーストラリアにおけるタ  
レント発掘の取り組み」. Grass Roots. 国  
立スポーツ科学センタースポーツ情報  
部. No.1.2003
- 9) 谢英. 21 世纪初我国竞技体育管理体制与  
运行机制比较研究. 西安体育学院学报,  
2002 p11-14
- 10) 王庆伟, 许广树, 李贵成, 噢大利亚高水  
平运动员培养体制调查研究, 体育科学,  
2004 p17-19